

# 銀

# 賞

『おはなししゃ』

# ねはなしゃ

長野県 佐久長聖高等学校 一年 横田 だ 優ゆう

秋ももう終わりが近く、吹く風にはなんだか雪の匂いがする、ある晴れた日のことでした。

「ねはなしゃ」のねすみのおじさんは、お気に入りの椅子に腰掛け、ペンを紙にひく、うーんとうなつていました。

「ねはなしゃ」というのは、皆が知っている通り、じとじと校舎に、うつでも、じいでも、誰にでも、胸がわくわく、ドキドキと高鳴るようなお話を一つしててくれる、何ともすてきなお仕事の名前です。

ねすみのおじさんは、この「ねはなしゃ」をもつと腰にいたしましたので、とっても素敵なお話で、森のみんなをうつとおしゃせるのはお井のもの。広い広い森の中を、奥の方までずっと探しでみて、ねすみのおじさんよりも上手にお話を作れるおはなしゃさんは、いないと云われていました。

でも、このおじさん、おじさんはいつもお話をじていてませんでした。「ねはなしゃ」のお店のドアの看板も、ずっと、「ただいまへいてんちゅう」のままです。

それだけが、めったに家から出でない、たまにばかりと森の広場で見かけでも、おでこにやつとしわをよせ、うんうんとうなつていてるばかりでした。

森のみんなは、おじさんが病氣にでもなつてしまつたのではと心配して、なんべんもおじさんの家を訪ねまし

たが、おじさんほつんうん[ハ]ばかりでひいとも答えません。

「ほこりせ、森のみんなおやじ、ねがみのおじやさん！」彼ら「ねがみおじやさん」ではなく「ハシハシおじやさん」と呼ぶものになってしまったのです。

さて、とひねでおじさんせと聊うと、今日もやつぱり、腕組みをして、田をわざゆと閉じてうなつています。お部屋の奥のお勝手で、火にかけつけなしのヤカンが、しゅんしゅんと湯気をあげてしるのにも、やつぱり気がつかない様子でした。

おじやんの「へーん、うん」という声が次第にどんどん大きくなつていき、いよいよヤカンの音よりも大きくなるぞ、といへ、まさにその時のことでした。

二、 $\pi_1$ 、 $\pi_2$ 、 $\pi_3$

おじさんのお店のドアに、とても大きな何かが、勢い良くぶつかる音がしたのです。

これには、思わずおじさんも、うなるのをやめて、アマまですつ飛んで行きました。

「なんだ、なんだ。一体全体何事だ」

ドアを開けるとそこには、何やらとてもとても大きくて、もじやもじやとした茶色のものがありました。

ちらりと、いつたまこは何かしら、と思つたおじさんでしたが、おじさんがあれこれと考へる前に、そのもじやもじやが動きはじめましたので、それが何かはすぐにわかりました。

「やあ、クマのぼうやじやないか」

もじやもじやは、おじやんの声を聞いて、嬉しそうに耳をよじり、ぐっと手で頭をトヂ、かわいらしいお

顔を見せました。

「じんじかせ、おじやんせ」

「じんじかせ。せひや」

「フマの坊やは、おはなしややんのお得意やんです。おじやんが、広い森のじりでお話を始めたのも、このフマの坊やだけはいつも駆けつけて、大きな体をお行儀よくちかがいめてお話を聞くのでした。

「おはなしややんせ、今日もお休み?」

「いやだよ。やあ、せっかく来てやったのにすまないね。悪いせじ今は、じんべつと交換でもねお話をが無いんだ」

「ねじやんが、すまなせじ」と言ひて、フマの坊やは首を振りました。

「あがつよ。せくせく、おじやんが、あんまりにもすつとお休みするものだから、おじやんが心配になつておみ  
まこにやたのや」

フマの坊やの、ややこしい心配にあがつとつれしへなつたおじやんせ、らげをひくわくやせばがり答へました。  
「せりやあ、心配やせて懸かつたね。でもね、この通り、おじやんせとじも元気ですよ。お見舞い、じつもあり  
がとい」

「それは良かつた」

「フマの坊やは、心底嬉しそうでした。

「それなりおじやん、かよつと氣が早いんだけれどね、次のお話せ、じへいの聞けやのかい」

やがて、じへいとこへらるフマの坊やにひらね、これまたじへいとこへらるおじやんですが、この質問には困りました。

「それはわかつと、分からぬいなあ」

「どうして、分からぬの？」

クマの坊やは不思議そうです。

「お話を、忘れちゃつたの？」

「いや、ちがうんだ」

「それじゃあ、どうしや?」

ねずみのおじさんは、はたして、正面に話したものかどうかと、悩みました。ところの、おじさんじだつて、自分が森で一番のお話名人だとじつじとを、語りしべ思つ気持ちはあつたからです。でも、坊やはせつかくお店まで来てくれたのです。うーん、うーんと一回語つてから、おじさんは、坊やには特別に教えることにしました。

「ええつー。」

「フマの坊やは、真ん丸な目をくりくりと動かして、心底びっくりした様子でした。」「そんなん。本当に?」

「本当さ」

「だつて、おじさんは、森一番のおはなしやさんじゃない  
「一番でも、一番でも、とにかく今は、作れないんだ」  
「それじゃあやつぱり、どこか病気なのかしら？」

「いやいや、まさか！」

びっくりしたおじさんのメガネが、かちやんと音を立てました。

「僕は「やる気」が足りないんだよ！」

「あんと、ママの坊やは、やつまとはまた反対側に首を傾げて、それじゃあ、と言いました。

「ねじやんは、どうしてお話をかけな「んだね？」

「それが、僕にもわからないのや」  
「そり、何でお話を作れなくなってしまったのかは、実のと「ん、おじやんにもわからないのです。  
なんべんも、なんべんも、立つたり座つたり、時には<sup>さがだ</sup>逆立ちまでして考えたりしてみましたが、考えれば考え  
るほど、おじやんの頭の中は、もやもやと、ミルク色の霧<sup>きり</sup>に包まれて行つてしまつのでした。

そうして、霧<sup>きり</sup>が出てくればくのほど、どんどん、お話を作れなくなつてしまつのです。

「ねじやんのお話を聞けないんじやあ、ほく悲しいなあ」

ママの坊やは、とてもしょんぼりとした様子で、おじやんまでも、何だか悲しくなつてしまつました。おじや  
んのお仕事は、お話をひいて、森のみんな元気に<sup>すくはい</sup>いじりです。何とか、<sup>まく</sup>やの悲しい気分を吹き飛ばせないか  
ようと、一生懸命考えました。

「やうだい、ほのきつや、じつか、「」せひひつ、ねじやんにきつやの力を貸してられないかい？」

ねじやんのお願いに、ママの坊やはすぐ<sup>いそが</sup>語<sup>ご</sup>をました。

「わからん、じつめ」

それから、坊やはちよつと<sup>かえて</sup>、一言つけ足しました。

「その代わりにね、新しくできたお話を、一番最初にほくに聞かせてもう二度ないかしひへー」

ねじやんは、にっこりして頷きました。

「もういいや、いいとも…」

それから、ねじやんは、ぴいぴいなつているヤカンの火を消し、お店にある中で、一番大きなひわかけを出してきて、ワマの坊やと一緒に、落ち葉の上に腰かけました。

「じやあまつや、今、考えていろ途中のお話を、試しに聞いてみてくれるかい？」

ねじやんがそう言って、ワマの坊やに話して聞かせたのは、赤の妖精あかせいの国に暮らす、ひとつほつちの青の妖精

さんか、仲間を求めて、野原を超えた谷を越え、旅をするお話をでした。

ワマの坊やは、最初は、田をキラキラとさせながら聞いていましたが、ねじやんがお話をやめのいふには、なんだかすこし、元気がなくなつてしまつっていました。

「まだまだ途中なんだけじね、えいだい？」

すると、うつん、と、坊やは首を横にふりました。

「これじやあ、だめみたい」

ねじやんは、ちよつと困つて言いました。

「じんなといひが、だめだつたんだい？」

「うーと」

腕組みをして、一回、首をひねつてから、坊やは言いました。

「なんだかね、ちよつとしかワクワクしないんだ」

「ほう」

「つまんなじんじやあ、ないけれど。でもね、ほぐが照つて、お詫びのせ、わいわいしゃべりやつよつなも  
のでなくわやうないんだ」

「へーん、と、おじやんせうなりました。

「れくれくかあ……」

赤とんぼが、すこすこと冷たい空気をぎりてゆきます。

「ええいと、それも、例えば冒険したりとか、お空を飛んだりとか、そういうのじやあ、ないのかい？」

「あねい、フマの坊やは、わつ一回、首をひねりました。

「やうだけど、わもつと、違うなあ」

「じやあ、どんないとなんだい？」

今度は、おじやんが首をひねる番でした。

「やうだなあ、あのね、やくやくあるつてこつのはね……」

フマの坊やが、落ち葉を一枚、拾いながら聞いてました。

「じぶかり特別じやなくともじいんだ。なにかよびつとでも、素敵なじじがあつたり、樂しいじじがあつたり  
あるじがに、何だかおもわす、につけしちやうよつなじじだよ」

フマの坊やの手の先で、真っ赤な葉のせせお田やまの光を受け、やわらかくとひかりました。

おじやんは、何か、最近、ちょびりとでも素敵なじじはあつたかしりと答えてみました。  
「いじやうせり、うーん、うーんと聞いてみましたが、昨日もおじじも、思つ出せるのは、お店の中で一  
人、ずっとお語のじじを聽いていた、ところじじだけでした。

「おじやんも、きつと、こんな気分を知つていいんじゃないかな？」

「うーん、思い出せないなあ」

「うーん、そうかあ」

今度は、ワマの坊やまでうーん、うーんと黙つておしゃべりました。

「むへつたら、おじやんも、ぞくしゃべりつてうのがどんな気分か、分かるかなあ」

「」のまんまでせ、ワマの坊やまで、森のみんなに「うとうんせのや」と呼ばれてしまつかもしません。

「うーん、すこと、トノボが」「」、おじやんと坊やの前を通り過ぎた所で、おじやんはやつこにやまつておしゃべりました。

「うだだなあ、じやあせりや。」のやがくしゃべるのは一体どうこの時なのか、試しに、もつと詳しへおじやんに教えてみたおくれ」

「わなわん、ううむ」

うーん、うんといつなるのをやめたワマの坊やは、腕組みをぱつとほじつて、真ん丸な田をうつじつと閉じました。

「ほぐがれくれくしおやうのはね、例えば、赤とんぼを追いかけてるとき。」のままで行くのかわからなくてううんだ。後ね、お使いの帰り道で、母さんと内緒で遠回りをする時。後はね……」

おじやんも、そつと田を閉じて坊やの話を聞いていました。それは、何だか新鮮で、でもちょっとびり懐かしいような感じがする話でした。

「うーん、おじやん。」のやがくしゃべりつてうのがじんな」とか、分かつた?」

「うだだねえ」

ねじやんは、田を開けてすとお部屋を見上げてみました。せのやも、ねじやんのまねをして、上を見てみました。何もかも、すっと溶けてしまったな、気持ちの良い青空でした。

そういえば、最後にお空を見上げたのはいつだったかしりと、ねじやんはほんやう考えました。それから、お空は、こんなに綺麗なものだったかしり、とも考えました。そして、久しぶりに見た今日のお部屋が、こんなにも透明なことが、少しつれしになりました。

ねじやんは、なるせび、といふやもしました。

「うん。何だかちゅうひ、分かった気がするよ」

「本当に?」

フマの坊やは、嬉しそうに、身を乗り出して聞きました。

「ねうだねえ、ひょいとしたら僕も、昔、ぞくぞくしたことが、あつたのかもしねな」

あると、フマの坊やはにじっとして立ち上がりました。

「良かった! でもね、ねじやん、せぐ もうし度こじと悪じついたんだ」

そして、すとねじやんを持ち上げると、あいつとの間に大きなてのひらにのせて、ずんずんと歩き始めたのです。

ねじやんは、かよつと慌てて叫びました。

「ねやねや、一体全体、じいへ行くくんだい?」

「じいぢり広場だよー」

「でも、今、かよつじお語の続きが書けやつになつてきただばかりなんだ」

すると、ワマの坊やはくすくすと笑いました。

「うんとどうぞ〜するお話を作りたいなら、おじさんからうんとどうぞ〜してみなくちゃ」

そして、ぐんぐんと、風のよう走り始めたのです。

「知らないものは、じぶんお話し上手だつて、きっと上手にお話しできないよ！ ちよつと分かつただけじゃだめだ！ せりおしゃべり、田を開けてみてよ！」

最初は思わず、坊やの手にしがみついていたおじさんでしたが、坊やの言葉にそつと口を開けてみて、思わずにつっこりしてしまいました。

「こりやあまいつた、こりやあすゞい！」

おじさんは、ひげをひくひくと動かし、大きな声をあげました。まるで自分がトンボになつたみたいです。落ち葉の匂い、じんじんの匂い、それからかゝよつて 霧の匂い。色々なにおいが、おじさんと坊やを「ソーピー」と洗つては去つてはくるやうでした。いつも見てる森は、びゅんびゅんと後ろに溶けてゆき、耳元では「お世おど、風がうなつて」します。

心臓が、あふれんばかりに踊つてゐるのが分かりました。

もちろん、あまりの高さと速さに、めまいがしなかつたわけでもありませんが、そのふわふわとした感じが、かえって心地よく、おじさんは前を向いたまま、ほうとため息をつきました。

やがて、どんぐり広場につくと、クマの坊やは、広場の真ん中に、勢い良べりんと横になりました。おじや

「ああ、疲れた！」

んも、ママの坊やからぴょんと飛び降りると、近くの切り株の上によじ登つて、横になりました。

大の字になつてしるおじさんと坊やに、かさかさと、赤、黄、<sup>だいだい</sup>橙、様々な葉っぱが降つてやります。おじさんと坊やは、どちらからともなく、ふふふ、と笑い始めました。降つてくる葉っぱも、かやかやとしてなんだかくすぐつたのですし、それに何だか、胸のあたりが、ふわふわ、くびくびとして、これまたくすぐつたのです。

やがて、その葉っぱがお布団ぐらいに降り積もつたころに、おじさんが、むくつと起き上がりました。

「やうやう。まづ起き上れるかい」

「まづやは、まだ少し、ふふふ、と笑いながらおじさんを見ました。

「ああ、楽しかった。また、おじさんのお店まで、走つて帰つたよ」

おじさんも、楽しそうな坊やを見て、思わずふふふ、と笑いながら、首を振りました。

「その前に、ぞくぞくするつてこつのが、一体どんなことなのか、教えてくれたお礼をしなくちゃ」「お礼?」

坊やは、むくつと起き上がりて言いました。

「ねつや。あこにいく、あげられるような物は、何にも持つてしなかつたんだけじね、でも、僕には、お詫がある。良かつたら、聞いていかないかい?」

おじさんがこつこつと笑つてそうじうと、坊やは、わあい、と両手をあげて、それからその手を口まで持つてきて、小さな声でおじさんに聞きました。

「ほく、とっても嬉しいんだだけじね、どうせならね、森のみんなにも、おじさんの新しいお話を、聞いてもらいたいんだ。でも、どうかしら。久しぶりにみんなの前で話したら、おじさんは、緊張しかやつ?」

「いじさい」

おじさんは、大きな声でそう言つと、自分の胸を、とんとたたいて見せました。

「大丈夫ですとも。何と言つても、おじさんは、森一番のおはなしやさんだからね、

クマの坊やは、それを聞いて嬉しそうにつっこり笑うと、くるりと広場を見渡しました。

「やあやあみんな、おはなしやのおじやんの、楽しいお話が始まるよ!」

卷之三

これが書いた。

「おじさんとお嬢じいだと想ふ」

おじいちゃんがお話を聞かせて

「うんうんおじせんが、おはなしやのおじせんにもどった！」

森のみんなは  
日々をなんごとを言しながら  
おじさんを困んで  
何だから嬉しいのです

おじさんはみんなの顔を見ながらも一度ふふふと笑って大きなか声を出しました。

おはなしやうじた来るしたよ  
思ひぞくそくひじるひだ  
新商たお詫あいあらわよ  
今、白

集まれ

さあ、皆さんも、森に向かつてそつと耳をすませてみてください。ネズミのおじさんのが、聞こえてくるかもしれませんよ。